シカゴコンサートホールで演奏するＦＭＣ合唱団

過去の苛烈な戦争のために、ヨーロッパに比べると我々の演奏に対して相当に批判的であったアメリカでの出来事である。

昭和六十年の夏、梁川ウィンド・アンサンブルを連れて、オハイオのケタリング市の壮大な大聖堂で演奏した際、アンコールに応えて"God Bless America"（アメリカよ栄光あれ）を演奏したことがあった。当日はちょうど四十回目の終戦記念日に当たる八月十五日だった。同市の或る有力者で、大戦中には海軍軍人として日本と戦った一人の老人が幹事のところに来て、

「アメリカは相変らず戦略戦争に没頭している。終戦後、日本は平和を求めているというが、果たしてどうかと疑っておった。今夜日本からの若い諸君が誠に清麗な音楽を聴かせてくれたので、日本が確かに平和を求めていることが判った。日本の若い諸君に私の気持を是非伝えて欲しい」

と言って立ち去られた事を、翌日になって主催者側から聴かせていただき、私は思わず目頭が熱くなって困った。

これより八年前の昭和五十二年にＦＭＣが同じオハイオのウルバナ市の養老院で慰問演奏をした折にも、これと似たような事があった。これらの事実から、私は、戦争というものは如何に我々の人生行路に大きな影響を残しているか、そしてまた、音楽が国際的な言葉として如何に大きな力を持つものであるかを改めて強く認識した次第であった。

日本の学校教育は明治以来百有余年になる。この間、英語教育において会話が軽視されたことを残念に思い、この点については、今後大学入試に英会話を取り入れれば、国際語である英語の会話を重視した教育の充実が見込まれると考える。他方、日本の音楽が発展し、特に本県には四百二十余の合唱団が有り、〝合唱県〟として各種コンクールで優秀な成績を収め、更には、これらの団体が海外演奏において必ず絶賛を博していることを非常に喜ばしく思っている。

提　言